

平成十五年十二月、高知県横波のゴルフ場を二十八才の青年実業家が購入した。

このゴルフ場はグループ4コースと共に平成十二年民事再生が申請され、三十代の内装会社の社長がスポンサーとなり再建中であつたが力つき再度全てが売却された。

新たに買い取った会社の社長とシステムの再契約をするために高知へ飛んだ。

甲子園や朝青龍で有名になった明德義塾高校から二十分ほど車で行った半島の先端に湾に囲まれるように美しいゴルフ場が作られている。社長は外食産業の若手経営者の会で勉強をしているらしく、洗練された服装や話振りは地方の青年と言う感じがしなかつた。ゴルフ場業界も名門とか格式にとられないサービス業としてのゴルフ場経営を始めようとする人が現れてきた。

翌日は広島県の三原に約束があり、高知空港から広島西空港へ飛ぶつもりであつたが飛行機が欠航中なので黒潮鉄道で岡山を経由して三原に向かうことにした。高知には何度か訪れていたが鉄道に乗るのは初めてだつた。四国山地の狭い溪谷沿いの特急列車が幾つかのトンネルを抜けながら冬景色の中を走り突き進む。この険しい山の中で空海が修行し坂本竜馬は脱藩の山越えを行った。特急列車は若き日の二人のようにひたすら前に進むことに集中しているようだ。

三原の駅前に宿をとり、おいしい瀬戸内の魚を食べようと近くの鮎屋のカウンターに座つた。普段は繁盛している店らしいが九時を過ぎていたし、クリスマスの夜でもあつたので客がバタバタと帰り始め、店内の客はカウンターに座つた常連らしい男と私の二人になつた。

四十代と思われるその小太りの男が話しかけてきた。「お仕事ですか」「はい」「どちらからですか」「水戸からです」すると男は隣に席を移してきた。ビールをかざしながら、左手で旅行会社のチケットが入っているらしい封筒をテーブルに置いた。

「実は、今日チケットを買つたんです。私は水戸に行かなければならないんです」と不思議な話をしてきた。見ると二十八日の深夜難波発「よかつぺ号」のチケットだ。高知と新宿の高速バスが便利だと聞いたことはあつたが、高速バスが水戸と大阪の間を走っていることを知る人は少ないだろう。旅が仕事のような私が、難波へ水戸からバスが出ていたとは知らなかつた。確かに旅費は半値以下、夜行なのでホテル代もかからない。「よかつぺ号」と言うネーミングにも恐れ入つた。それにしても、待ち伏せされていたようなうさん臭い話だ。

「大甕神社の宿魂石が私の来るのを待っている」のだと言う。その案内人がこの店に来るような気がしていたと神がかりなことを言う。不審顔の私を見て、カウンター

の中から「この人は医学界では有名な人で医学の本なんかも出してるんです。」と応援が入った。聞けば胆石などの発見をするエコー診療で名前のついた三浦方式と言うのを発表している人らしい。

二十数年前、まだ、システム会社をはじめる前に、私は「海と神々と太陽の大地」と言う小さなスライド映画をつくった。アルビン・トフラーの「第三の波」が工業化社会から知識産業化社会の到来を予見していた頃、ふるさとの街がどのように変貌してゆくのか、過去から未来を見通して見ようとした。

隣の水戸市は歴史の街で、水戸学という水戸光圀以来の文化の町でもある。しかし、人口こそ十五万になっていたが、私の街は戦前に軍需工場が作られてから五十年の歴史しかないのだれもが思っていた。しかし、取材を始めると古代から現代まで実に豊かな物語があらわれた。そして、常陸風土記が記した大和朝廷の軍神武甕命と国津神のカガノセオとの戦いがロマンあふれる壮大な物語として語られている。

悪神カガノセオは戦いに敗れ宿魂石として封じ込められてしまう。この神話が七十年に一度行われていた四十八ヶ村の神輿が参加したといわれる磯下り祭「ヤンサ祭り」の起源となっている。その取材のためにカメラマンを連れて宿魂石を撮影にいったことがあった。

三浦 「カガノセオさんが鎖を解いてくれと私の夢に出てくるのです」

私 「さわらぬ神に祟りなしですよまずいでしょう」

三浦 「いや、新しい力が必要になっていいるのです。是非案内して下さい」

私は携帯番号の入った名刺を出した。

二十九日の朝、大甕駅前では妻と二人で三浦氏を出迎えた。車に乗せ神社に向かった。国道の西側にも鳥居があり宿魂石が西にあった記憶があったので先ずそちらに連れていった。社の真上に日立研究所の白い建物が被いかぶさるように見えた。

「あの大きな建物が日立研究所です。」と指さすと三浦氏は

「日立研究所ですか、以前に日立の人にここの話を聞いた事を思い出しました」と夢からさめたようにつぶやいた。

本殿の脇に岩山がありそれを登ると囲いの中に小さな社があり、その後ろに大きな石がある。囲いの門に鎖がからめてあった。彼は躊躇なくそれを解きなかに入った。石の前で彼が洗礼を受けたという原始キリスト教の呪文を唱えはじめ。すると本殿でご祈祷が始まったのであろうか大きな太鼓の音が鳴り響いてきた。その後、静神社などを案内し、その不思議な男は夜行バスに乗って三原に帰っていった。

果たしてカガノセオはあの日に鎖を解き放たれたのか、何故なのか、謎である。

広島県三原市で出会った不思議な話のその後

その不思議な話は続いていた。いや、三原との因縁はもっと古く七十年前から続いていたことを、最近知りいまさらながら驚いている。

平成十八年九月に九十歳の父が軽い脳梗塞で入院した。旧軍人であった父は六十年前の終戦時に皇居前の広場で切腹していたはずの人で、戦後六十年を好きなように生きてきた分は余禄であると言っていた。その父が入院に際して「死ぬ事は怖くない、若い頃、山崎益州という坊さんに教えられているから」と訳の分からないことを言っていた。事実、約二ヶ月の入院後に帰真した父は淡々と旅立った。

父と三原の関係は、海軍兵学校の生徒であった父が二十歳の時に三原の佛通寺と言う禅寺で、当時、関西随一の高僧と言われた山崎益州老師から死生観の講義を受けた時からのものだ。そこへ、たまたま仕事で三原に行った息子へ不思議なメッセージが届いていた。その事に気付いたのは、母が遺品のノートに「海軍時代の思い出」という茨城県海軍三校会の会報に出そうとしたらしい父の原稿の下書きが残されていたのを見つけたからで、父が書き残していた文章の三原の部分とは以下のものである。

広島県三原の佛通寺という禅寺に指導教官の松木中佐に引率されて、クラスメートと共に参禅したのは二号生徒の春休みのことだった。当時、関西随一の高徳と言われた管長の山崎益州禪師の死生観という講話を聴く為であった。一朝事ある時は一命を祖国に捧げる軍人として、死の恐怖を超越できる修業が必要と思っていたからである。

春まだ早い山寺の底冷えする朝、がらんとして広い畳敷きの講堂に、三十人が剣道の稽古着姿で正座し講師の入場を待った。先ず、元広島文理大学哲学科の教授が仏門に入り雲水となった藤井虎山という人が一時間半ほど講義をした。死について哲学的な角度から考証した話は実に面白かった。次が益州禪師の講話である。藤井虎山級の雲水でさえ私どもの心を打つ話をしてくれたのだから、禪師は一朝にして死の恐怖から我々を解脱させてくれるであろうと期待して入場を待った。

しばらくして、立派な衣で正装した禪師が温顔にこやかに入場して来た。その温顔に打たれてしばし寒さを忘れたのであるうか、部屋が急に暖かくなった思いがした。そして、私共の前に端座した禪師は静かに口を開いた。「昨夜は三里の山道を登って当山を訪ねてくれて御苦労さんでした。拙僧は皆が来ると言うので、雨の降りしきる夜空を眺めながら、もっと降ればいい、もっと降ればいいと思っていた。若い頃の苦しみは買っても苦しめというが金を出さずに苦しむことが出来る事ほど有難いことはいから」と言った調子で始められた。それから禪師の若い時代の難行苦行の話が延々

と続いた。やぶの中で裸のまま座り蚊にさされてかゆい処をじっと我慢し通した話や、極度の暑さ寒さに堪え抜く荒行を通して不動の平常心を養う行の話などがあつた。正直なところ坊さんの説教としては並みの中ぐらいとしか感じなかつた。

そして、最後に死生観の話に入つた。禪師は言つた。「死とは息の止まることである。これは何人も疑う余地のない事である。人は息を吸いそして吐き出す瞬間には息が止まつている。これも疑うことが出来ない。人は誰でも一分間に十七回乃至十八回死んだり生きたりしている。「これも禪師の論法から言へば正にその通りである。そして、禪師は次に驚くべきことを言つた。「それが何かの間違いで息が長く止まると死んだと言つて、にわかには驚き、悲しむ。私にはその気持ちかわからない。死とは息が止まることである。そして、又生き返る。「そう結んで禪師は立ち上がり席を去つた。ものの三分とかからぬ時間の出来事であつた。

私共は啞然とした。そして、次の事に気がついたのである。死とは息の止まることで毎日くり返され、生き返つてゐる。仏教の輪廻説であろうか、禪師は知識として知つてゐるのではなく信仰として信じてゐるのである。だから死について他に話がないのである。ただ知識だけを追う世界にいる者には藤井虎山の様に一時間半に及んでも尚語りきれない話がある。而も死を知らないのである。禪師がそうした信仰に到

達したのは、死を恐れおのきつつ、難行苦行を重ねて、はじめて到達し得た境地なのであると言ふことだつた。我々は信仰の力の強さに感動し、立ち去る禪師の後姿を拝む思いがしたのであつた。

数年前五十年振りて佛通寺を訪ねたが山崎禪師は無縁なく藤井虎山当時雲水が管長として居られたがあいにく御不在だったので逢ふこと事が出来なかつた。伽藍改築の瓦代を納めて去つた。

日本全国にゴルフ場の数は約二千四百ある。弊社は十一年前からその一つひとつのゴルフ場にゴルフ場基幹システムを売り込んで、北海道から沖縄まで全国約四百ヶ所に納入し稼動させて頂いてゐる。広島県にも約五十ヶ所のゴルフ場があり平成十五年の秋に納めた前段の三原のゴルフ場が広島県内では初めてのお客様であつた。

バブル経済という言葉が忘却のかなたに消え去ろうとしているがゴルフ場業界には今なお深い爪痕を残している。会員権ビジネスで巨額の資金を集めて作られたゴルフ場は過剰設備投資により、その運営面だけでは採算がとれず苦しんでいた。そして、値下げによる集客競争が始まり経営を圧迫し、集団的な倒産へと進みはじめた。

その状況を打破するために経営情報システムを構築し、イールド・マネジメントや収益管理による経営改革を提案した弊社のシステムが評価されて全国に広まつた。

もちろんゴルフ場業界も、この間に、大きく変貌し民事再生や会社更生法などを使った再建が本格的に始まったのも平成十五年頃からだった。そして、外資といわれる外国証券会社の幾つかのファンドが運営する会社が国内のゴルフ場專業会社をあつと言う間に買い取ってしまった。もちろん、弊社のメイン・ユーザーのグループも例外ではなく外資の傘下に組み込まれていった。それはさながら黒船襲来のように激しい変化をもたらした。そして、それまでのゴルフ場経営を根本的に変えていった。

百コース以上のゴルフ場を経営する外資のゴルフ場運営会社は、その規模の利益を活かし予約から商品、顧客管理までを一元的に管理し、大量のデータ分析による料金決定など新しい戦略で客数の少なくなったゴルフ場をみごとに復活させている。

あれから三年半が経過した。最近、広島県に二コース目と三コース目の弊社ゴルフ場管理システムの導入がされた。そのゴルフ場のある場所が本郷・竹原と三原に隣接した町で、あの佛通寺を三つのゴルフ場が囲むようにあるのは単なる偶然なのであるうか。

私はこの六月、父の冥福を祈るために家族を連れて初めて佛通寺をお参りした。そして、風向明媚な「しまなみ海道」を四国・今治までドライブしてきた。

平成十九年八月記